

上田三四二先輩と『新潮45』

(90・6・18 東京分館)

亀井 龍夫(昭24一修文丙)

ゲストスピーカー急用のため代役として呼ばれました。もとより何の準備もなく、お断りしたかったのですが、「お前が編集している『新潮45』の話でいいよ」ということで、お引き受けいたしました。『新潮45』は名前からして風変わりですし、内容も他誌とくらべると少し風変わりです。何でお前はそんな風変りな雑誌を作っているのか、とお考えの先輩もいらつしやることと思いますので、いわば一種の弁解の機会を与えられたのだというふうを考え、思いつくままに話をしてみることになります。

『新潮45』という誌名についての話は、われながら恥ずかしい感じの話にしかありません。私が編集にたずさわる以前は『新潮45^{プラス}』という雑誌でした。その名のとおり、四十五歳以上の読者を対象にした健康雑誌だったので。発刊後三年ほどして、ついに善戦空しいという状況になり、編集部も誌面も一新して再出発ということになったわけです。そのときに『^{プラス}45』を取り払

いました。そして内容も健康雑誌ではなく普通の総合雑誌に変えることにしたのです。新しい誌名にするという考えもありませんでしたが、古い誌名も珍しさゆえかそれなりに広まっていたので、とりあえず邪魔な『^{プラス}十』を取っただけの『新潮45』にした、というふうにご理解いただければ結構です。

さて、普通の総合雑誌と申しましたが、もちろん『文芸春秋』、『中央公論』、『諸君』などといった既存のものとは全然違うものを目指しました。そうでなければ新しい雑誌を作る意味がありません。が、新しい雑誌と一口にいつても、何が新しい雑誌なのかはまるで雲をつかむような話です。しかも、ヴィジュアルな雑誌でなければ売れないといわれている時代に、グラフィアの一ページもない活字のみの雑誌で勝負しようというのだから大へんです。文字どおり暗中模索の数ヶ月を送りました。当然、部数は下向の一途。

ここで、あるいは不快な思いをなさる方がいらっしやるかもしれませんが、私の病気の話、つまりガンの話をしなければなりません。ガンの話をするのは厄介なものだということを、私は自分がガンになってから知りました。たとえば病院に見舞い客がやってくる。その見舞い客に「私もとうとうガンにやられました」といいます。すると急に座が白けるというのでしょうか、見舞い客は顔をこわばらせて、居たたまれないというふうになり、そそくさとお帰りになる。だから私は「ガン」ではなく「ポリープ」ということにしました。そうすると見舞い客は「よかったね

ポリープで」といって喜んでくれます。ガンは一種の禁句なのです。ガン告知是非かの問題に、私はこういうことも少し関係があるのではないかと考えています。

それはともかく、私は真正正銘のガンでした。少し変わった医者で図解までして説明してくれましたので間違いはありません。大腸ガン。詳しくいえば上行結腸腺ガン。たいていの大腸ガンの場合と同様、早期発見ではなく、手術は大腸の三分の一を切除する「拡大根治手術」（と医者はいつていたと思うのですが）でした。

手術は成功でした。おかげで私は今なおこうして生きていられるわけですが、もちろん入院中はそうではありません。今から考えれば滑稽至極としかいいようがありませんが、頭の上にはぶら下がっている抗ガン剤の点滴瓶をにらみながら、わが生もこれまでかと思ひ、そして大あわてで自分のためのデス・エデュケーションにとりかかったというわけです。といっても哲学書をひもとく暇はありませんので、近くの書店へ家内を走らせ、それらしき本を何冊も買ってこさせました。インスタントのデス・エデュケーション。われながら哀れな話だと思ひます。

しかも、これは当然のことなのですが、もっと哀れだったのは、それで私のデス・エデュケーションは少しの進展もなかったということです。笑い話でもしているような感じになってしましますが、ガン闘病記、あるいは死について書かれた本に、ロクなものはありません。ベッドに寝ていながら、私があまりのことに呆然となったのを、今も私ははっきり覚えています。そして、そ

のときから、退院したら『新潮45』でデス・エデュケーションをテーマの一つにとりあげようと思いついたのです。医者は「一年は保証する」といつてくれましたので。

いしましたが、死について書かれた本でロクなものはありませんと申しましたが、実は一冊だけ例外がありました。三高の先輩で歌人の上田三四二さんの『この世この生』（新潮社刊）という本。もうガンで亡くなられましたが、そのころはまだご存命でした。上田さんの最初のガンは私と同じ大腸ガンで、その大手術のあとでお書きになったのが『この世この生』です。この本の中で上田さんは西行と良寛と道元と明恵について書いておられますが、私が最も感銘を受けたのは西行でした。

では上田さんの西行のどこに感銘を受けたのか。それを説明しなければなりません。そうすると今の私はだらしないうちにただただ困惑するばかりで、到底うまく説明することはできません。ただ、「死の向う側」という言葉を上田さんは使っておられたと思います（を見つめながら上田さんが西行を読みなおすと、西行の今まで見えなかつたところも見えてくるという具合で、上田さんはそれを淡々と書いています。しかし、それをベッドで読んでおられますと不思議に心が安まってくるのです。別段「死とは何か」について上田さんが書かれているわけではなく、またこれといった私にとって救いになるような言葉があったわけでもありません。しかしとにかく、ロクでもない本の山の中からこの一冊を発見したことが、私の救いだったことは間違いありません。

ん。

退院後しばらくして、ふつうに歩きまわれるようになってから、もちろん私は上田さんをたずねました。これで病気の上でも先輩後輩の関係になりましたのでよろしく、といったところでしょうか。まことに奇妙な表現になってしましますが、そのときのことを今思い出しますと、上田さんは少し嬉しそうに見えましたし、実は私もそうだったろうと思います。決して好きな言葉ではありませんが、同病相憐れむとはこのことかと、内心おかしかったのも記憶しています。

先にも申しましたが、ガン患者は健康な人の前ではガンの話をするのを控える傾向があります。相手に気まずい思いをさせたくないからです。その点ガン患者どうしは大っぴらにガンの話がでる。お互いの病状についても遠慮はいたしません。少なくとも上田さんと私の間ではそうでした。

ご存じのとおり上田さんは京大医学部を出られた医者ですし、専門家としてガンの話をなさいました。そのとき上田さんは二度目のガンの大手術のあとで、そのガンは前立腺のガンでした。術後の体の調子、そのための日常生活の変化、そしてやがて来る自分の死についても詳しく話をなさいました。つまり、入院中にはなしえなかったデス・エデュケーションを、私は上田さんをたずねてやつとなしえたということになります。

デス・エデュケーションと申しましても、私は上田さんから宗教にまつわる話はただの一回も聞いたことはありませんでした。すぐれた歌人であり、川端文学賞に輝く作家、評論家でもある

上田さんは、しかし三高の理科を出た生粋の科学者でした。先ほど上田さんが「死の向う側」を見つめていたと申しましたが、そういう生粋の科学者である上田さんが「死の向う側」をどのように考えていたか、あるいは考えようとなさっていたか。これは正直に申し上げて私個人にも大いに興味のある問題で、それについても上田さんがかなり真剣に話をしてくださったのを、今も私は忘れられません。それは四次元の世界のこと、私には少々むづかし過ぎましたが、しかし非常にスリリングな気分には浸れるものでした。

それ以後も私はしげしげと上田さんをたずねました。はじめのうちは起きておられた上田さんも、やがてベッドの人になり、「亀井君、とうとうガンはヘソのところまで来やがったよ」といしながら、フィッシャーディスカウの「冬の旅」のテープを枕元のカセットラジオで聴いたりなさっていました。その次にうかがったときは、ベッドの横の花瓶に挿してある野の花（豪華な花ではなく、いつ行っても上田さんの歌に出てくるような寂し気な野の花でした）に目をやりながら、「亀井君、ここまですますとね、不思議にもう死ぬことを怖いとは思わなくなりますよ。それよりこの苦痛を早くおしまいにしたいと考えるようになりました」と、先輩として後輩の私に教えてくださいました。これは今なおナマナましい思い出として私にあります。

その時期、もう上田さんをたずねる編集者など一人もいず、私がたずねて行きますと、いつも大そう嬉しそうでした。むろん私も編集者としてではなく、後輩としておたずねしていたのです。

が、上田さんが亡くなられたのは、それからまもなくのことです。昭和の最後の年がはじまって八日目だったと思います。

さて本題に戻らなければなりません。幸運にも術後はなほだ好調だった私は一月そこそこで退院をし、自宅療養もほぼ一か月できりあげて戦線復帰を果たしましたが、それから取りかかったのが、デス・エデュケーションでした。まずノンフィクション作家の柳田邦男さんにおねがいして、『『死の医学』への序章』の連載をはじめました。これは千葉大学医学部の精神科医がガンと闘いながら死ぬまでの克明なドキュメントです。みずからの病気を知悉しているという点では上田さんのケースと同じであり、宗教に救いを求めないところもそっくりですが、しかしそれでも上田さんの場合とは全く違うストーリーになりました。それはともかく、流行作家で仕事のスケジュールに追われる柳田さんが連載を快諾してくださったのは、私のケガの功名ならぬガンの功名だったかもしれません。

次が曾野綾子さんにおねがいをした、タイトルもそのものズバリの「私の死ぬための準備」です。曾野さんは私の入院以来の状況をすべてご存じで、この企画を新年号の「目玉」にしたいからと私がいったとき、ニヤツと笑って二つ返事で引き受けてくださいました。金ピカ表紙の新年号の雑誌といえば、めでたい読物でうめられるのが業界の常識でしたから。

何一つ確実なもののないこの世で、唯一、死ぬということだけは確実で、それは感動的といっ

てもいい事実だ、というのが、三十ページに及ぶ曾野さんの長いエッセイの書き出しだったと記憶します。曾野さんはクリスチャンですが、その宗教的信条を表に出すことなく、一般に現代の日本人は死のことを考えなさすぎるのではないか、もっと子供のころから死についての教育がなされてもいいのではないか、などなど、画期的といってもいい指摘やら提案をなさいました。この長いエッセイは『夜明けの新聞の匂い』（新潮社刊）に収録されています。

この曾野さんの長いエッセイが新年号を飾った年の『新潮45』は、もしかするとデス・エデュケーションが編集方針の一つの柱として定着した年といえるかもしれません。曾野さんのエッセイが好評だったものですから、第二弾として野坂昭如さんに今度は「ぼくの死の準備」をおねがいし、さらに「死ぬための生き方」と題する特集を前後二回にわたって掲載したのもこの年です。この特集には上田三四二さんにも寄稿していただきました。インタビュー時代にガン性腹膜炎で静かに死んでいった青年を看取った思い出にはじまり、死と向いあっているご自分の心境を、このように死んでいきたいという希望を、驚くばかりに率直に書いていただきました。

一つでながら、ほかに三高の先輩としては聖路加の日野原重明さんにもご寄稿をねがい、死は前からではなく後から、潮の満ちてくるように知らぬ間にやってくるという『徒然草』をひきあいに出しながら、ご自分の覚悟を書いていただき、さらに末期ガン患者には無用の延命医療より安楽死をとという提案をしていただいたように記憶しています。昨今、尊厳死がちょっとしたブー

ムの様相を呈しているようにも見受けられますが、日野原さんのこのご提案は、その先駆けだったのではないでしょうか。

この特集は新潮社から二冊の本になって出版されています。『死ぬための生き方』と『生きるための死に方』。なぜか出版部の担当者が二冊目は「生」と「死」を逆にしたため、その方は少し売れゆきが悪いようですが、これは余談。上田さんのように、すでに亡くなられた方のエッセイもいくつかこの中にありまして、たとえば最近亡くなられた開高健さんのものも収録されています。たしか、原稿を書くこうとして机に向うと、死というものがテーマだからか、窓の日差しが急にかげってきて、にわかには身辺がたそがれたように感じられる、といった調子の書き出しでした。おそらく亡くなられたときから逆算して、すでにご自分の死の近いのを心のどこかで感づいておられたのではないかと思えます。

この話でもおわかりいただけるのではないかと思います。死をテーマにエッセイを頼むのは、頼まれる方もさることながら頼む方も少々辛いところがあるものです。健康法とか長生きの法などを頼むのはラクです。そのせいもあるのだろうと思いますが、およそマスコミでは死というものを扱わない。少なくとも、『新潮45』で「死ぬための生き方」を特集したころはそうでした。健康や長生きの記事ばかり。逆に『新潮45』は私が編集を担当するようになってからというもの、健康や長生きのページは一ページもない。吉行淳之介さんから『新潮45』は不吉な雑誌だから

かわれたことがあります。まことに言いえて妙だとそのとき私は思ったものです。ただ、これ
で『新潮45』が部数をのばしたのは事実です。

どうも口はばつたい言い方になるのが困るのですが、この『新潮45』が突破口になって、マス
コミが死の問題を日常的に扱い出したような気がいたします。朝日新聞が「余白を語る」という
コラムを設け、高齢の著名人のインタビューをはじめたのが皮切りで、昨今は安楽死あるいは尊
厳死の問題に見られるように、わりと死を扱うようになりました。『新潮45』が「死ぬための生
き方」を特集したころは、まったくそんな空気はマスコミにはなく、わずかに上智大学のアルフ
オンス・デーケン先生のデス・エデュケーションの講座をめぐる記事が、ときおり新聞に載る程
度でした。

ガンのため検事総長の職をしりぞき、それからまもなく亡くなられた伊藤栄樹さんの手記が
『新潮45』に掲載されたのは、この「死ぬための生き方」の年の翌年のことでした。伊藤さんは
検事総長辞職の記者会見でご自分のガンのことを話され、新聞・テレビが騒然となったので、ご
記憶の方も多いと思いますが、私はその前に伊藤さんの病状を知り、すでに手紙のやりとりをは
じめていました。伊藤さんの親友に岩波書店の大編集者だった方がいて、古くからの私の知り合
いでもあります。その方が私の病気及びその後の私の仕事をご存じだったので、伊藤検事総長
闘病の情報提供者になってくれたというわけです。

さすがの私も相手が相手なのでひるみませんでした。しかし、『新潮45』を病床で読んでくださった伊藤さんの方が、むしろ積極的になってくださいまして、手記を書こうということになりました。そのとき伊藤検事総長の肺ガンはもはや末期にさしかかっていました。

原稿ができたから取りにこいといわれて、はじめて虎ノ門病院に伊藤さんをたずねた日のことは忘れられません。私は白百合を持参しました。白い花は病院へは持っていけないならわしは知っていました。花屋の店頭で見たその美しさにひかれ、きつと伊藤さんにも喜んでもらえるという、ひらめきみたいなものを感じたからです。案の定でした。謹厳そのものの検事総長の顔が、花を見ているうちになごやんでいくふうで、「美しいなあ」とつぶやかれ、しばらく花から目をはなされませんでした。

私はその場で原稿を読ませていただき、タイトルは「人は死ねばゴミになる」にしたいと申しました。原稿の中で伊藤さんが奥さんと死後の世界について話し合われるくだりがあり、そこで伊藤さんが口になさった台詞でした。その私の申し出に伊藤さんは二つ返事でした。

原稿は百枚をこえる長編でしたが、未完です。次はいついただけるかという私の問いに、伊藤さんはニッコリ笑いながら、「それはぼくの死んだときだな。死の直前までぼくは書くつもりです」と答えられた。「人は死ねばゴミになる」は、実際そのとおりになりました。残念ながら最後は薬の作用でご自分では書ける状態ではなくなり、付き添っている家族の方の口述筆記となり、

ついには意識が混濁してきてそれも不可能とはなりましたが、それでも盛んに口述を続けようとし、その言葉が聞きとれなくて困ったという話が、三回にわたって連載された手記の最後のところろに家族の方によって書かれています。伊藤さんは二回目が雑誌に載っているときに亡くなられました。

事前の準備なしで話をはじめたものですから、話はどうどん横道にそれてしまいました。『新潮45』の話をするつもりが、すっかりガンの話になってしまったような気がします。どうかおゆるしく下さい。ガンの話を切りあげて『新潮45』に話を転じますと、デス・エデュケーションを編集の柱にするようになってから、何を『新潮45』でやればいいのか、しだいにわかってきたような気がしてきたものです。

たとえば、この話も死に関係がないことではないのですが、日本人の平均寿命の問題。ご存じのとおり、日本は男も女も今や世界一の平均寿命を誇る国ですが、どうしてそうなったかについて日本のマスコミはまるで無関心かのごとくに見えます。今から十数年前、どちらかというところでは世界の先進諸国の中では、最も平均寿命は短い国に属していたのではないのでしょうか。それが経済の高度成長とともに、またたく間に世界のトップに立つ。諸外国も少しずつ平均寿命はのびてはいますが、それらをあつというまに日本は追いこしてしまふ。これはいつたいていどういことでしょうか。

マスコミは、めでたいめでたいとはやし立てるばかりで、この奇妙というべき現象の原因については口をつぐむ。マスコミのこういう態度も含めて、『新潮45』では何回かこの問題をとりあげました。乱暴を承知で、かつ誤解をおそれずにいえば、これは老人医療、老人福祉の行き過ぎです。こういう行き過ぎにはマスコミは目をつぶる。が、その結果に何が起るかといえ、尊厳死、安楽死のブーム。またまた乱暴なことをいいますが、長生きよりも死ぬことを老人たちが選んでいるということになりはしないか。考えようによっては滑稽な話です。またたく間に世界のトップに立った日本人の平均寿命は、ひよっとすると世界の先進諸国では笑いものになってはしないか。

これも『新潮45』がさまざまな角度からとりあげて以来、心なしか新聞その他のめでたいめでたいといった論調はカゲをひそめてきたように思います。そういえば、いつでしたか、またまた平均寿命の記録が更新されたという記事の隣りに、老人医療のムダ使いを批判する記事を載せた新聞を見かけました。

言論は自由だといわれながら、実は新聞が書かない、書けないことは多々あります。これもデス・エデュケーションの間にわかってきたことです。もう一回だけ乱暴なことをいわせてください。最近政治改革が話題ですが、今の日本の選挙は衆愚選挙、民主政治とはいっていてもプラトンの予言した衆愚政治こそ今の日本の政治。新聞記者一人一人は皆そう考えている。が、それは

書かないタテマエとなっているのです。

新聞のできないことなら、『新潮45』で喜んでやりましょう。これが今の私の編集方針です。衆愚選挙、衆愚政治という言葉、『新潮45』が使っているうちに、ようやく新聞紙上でもこれらの言葉が見られるようになってきました。もっとも、それはまだ識者の談話か原稿の中で、記者の書く記事の中ではありませんが。

この話の冒頭、『新潮45』を風変りな雑誌と申し上げましたが、そうならざるをえない理由がこれでおわかりいただけたのではないかと思います。新聞や他誌のできないことを『新潮45』はやる。これでは風変りになるのが当然でしょう。

別のいい方をすれば、『新潮45』はマスコミの中の少数意見ということにもなりましょうか。しかし、考えてみれば、日本のマスコミほど少数意見の見当らないジャーナリズムもないのではないか。一犬吠えれば百犬吠える。それが今の日本のマスコミで、そうであるなら、吠えない一犬ほど貴重なものはないかもしれない。なにか自画自賛になって気恥ずかしい限りですが、三高同窓会の最後尾をとぼとぼいく一匹の犬のつぶやきとして、おゆるしいたきたいと思います。

(前「週刊新潮」編集次長・「新潮45」編集兼発行者)

(以上は三高「十八日会」で喋ったときの速記録に大幅に手を入れたものです……亀井)